

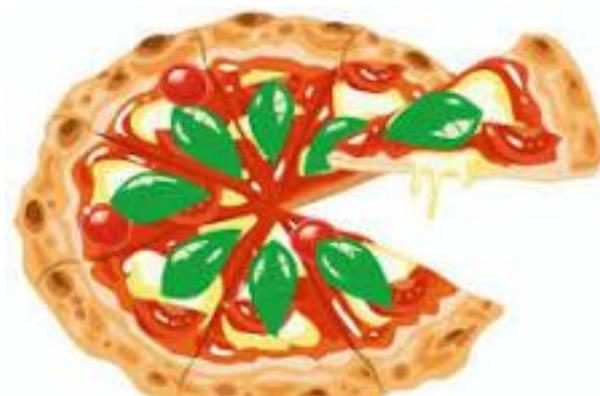
安西祐一郎先生

「AI さえあれば教育課題が解決するという考え方は誤り」

AI 技術の進展によって、教育現場への AI 導入が注目されていますが、AI さえあれば教育課題が全て解決するという考え方は誤りです。AI を効果的に活用するためには、ソフトウェア、ネットワーク、データ基盤の整備が不可欠です。AI はピザのトッピングのようなものであり、土台がなければその機能を十分に発揮できません。GIGA スクール構想の推進は評価されていますが、ネットワークの整備や端末の更新、家庭での利用の可否など、現場には多くの課題が残っています。

ロボット教師と人間の教師の役割分担

AI 時代における「ロボット教師」の導入は、教育現場の効率化に貢献する可能性があります。AI は学習評価、成績処理、統計調査などの「対物」業務を効率的に処理できます。特に、通信制高校では高度なシステムが導入され、AI の利活用が進んでいます。しかし、人間の教師にしかできない「対人」業務、特に生徒との対話や感情的なサポート、個々の学習ニーズに応じた柔軟な対応は AI には難しい領域です。教師は生徒のモチベーションを維持し、フェイクニュースの見極めなど批判的思考力を育成する重要な役割を担っています。教育における AI の役割はあくまで補助的なものであり、教師の存在が不可欠です。



教育データは誰のものか

AI の導入に伴い、教育データの管理と所有権が大きな課題となっています。デジタル庁の通達（2022 年）で学習データ共有の推進が謳われましたが、教育分野に疎い人が書いた文章だったためか、「政府が全ての学習データを管理するのは危険だ」という懸念が広がってしまいました。学習データが生徒、教師、学校のいずれに属するのか、明確な基準はほとんど議論されていません。本来、学習データは生徒本人のものであるべきですが、未成年の場合は保護者の関与が必要です。生徒の学習データの所有権を学校や教師が持つことはできないと考えていますが、どんな場合に学校あるいは教師が管理してよいのか、議論が必要です。

教育データの適切な管理と活用は、個別最適化学習の推進に不可欠です。しかし、データの取り扱いを誤るとプライバシー侵害のリスクが伴います。例えば、生徒の学習状況を分析し、AI が最適な問題を提供するシステムは効果的ですが、どのデータをどのように蓄積・共有するかについてのガイドラインが不十分であれば、生徒のプライバシーが危険に晒される可能性があります。

教育支援とその課題

AI を活用した適応学習システムは、生徒の間違いを分析し、新たな問題を生成することで個別最適化を図ります。しかし、同じレベルの問題を繰り返し提供するだけでは生徒の関心は薄れます。教育においては、AI が提供する問題の質と、生徒の動機付けをどのように維持するかが重要な課題です。

教育現場では、どの業務を AI に任せるか、どの業務を人間の教師が担うかを明確に分ける必要があります。学習評価や成績処理のような業務は AI に任せられますが、生徒の個別指導や対人関係の構築は、今の AI 技術では人間の教師にしかできません。さらに、部活動や校内清掃のような

業務については、アウトソーシングが進んでいますが、これは地域社会との関係や財源の問題が関わっており、AI や IT の導入とは別の社会的な課題を含んでいます。

教育インフラの整備と課題

AI を活用するためには、IT システム、データプラットフォーム、ネットワークシステムの整備が不可欠です。しかし、現状ではこれらのインフラ整備が遅れており、教育現場のデジタル化が思うように進んでいません。AI 時代における教育の質を向上させるためには、これらの基盤整備が急務です。また、教員研修やデータの標準化も重要な課題です。特に、免許更新制が廃止され、教員研修の内容も時代に合わない中で、AI 時代に合わせた教員研修の在り方を構築することが重要です。2022 年にデジタル庁はロードマップを公表、さらに 2024 年度内に改定を目指していますが、デジタル庁の議論と教育の現実はまだかけ離れている部分が多く、実現には時間とリソースだけでなく、デジタル技術の世界と教育界の相互理解が必要です。

AI 時代の教育は、AI 技術の進展によって大きな変革を迎えています。ロボット教師や AI システムが教育現場の効率化に貢献する一方で、人間の教師にしかできない役割も多く存在します。AI と人間の教師の役割を明確に分け、両者の強みを活かした教育環境の構築が求められています。教育データの管理と所有権についても明確なガイドラインが必要であり、プライバシー保護とデータ活用のバランスを取ることが今後の重要な課題です。